

---

FateZero 月に照らされた『殺人貴』

眠れる英雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FateZero 月に照らされた『殺人貴』

### 【Nコード】

N8995Z

### 【作者名】

眠れる英雄

### 【あらすじ】

運命を呪った男が、最強の『殺人貴』を呼び出す。その二人に待っているものは

(前書き)

型月を読んでいる時に思い付いた作品です。もしも『直死の魔眼』を持ったオリ主がいたら？ そう考えて書いたので、設定が若干あやふやです。

このオリ主は、衛宮家で士郎と同じ年で、マスターではなく関係者として巻き込まれています。後イリヤにサーヴァントとも呼ばれていて、あらゆる可能性があった聖杯戦争でした。なので、全ルートを経験していると思ってください。

では、続きが気になる方は感想でお待ちしております。

そこにあるのは闇だけだった。光が届くことのない闇の世界。あるのは、夜空に輝く月だけだった。

……俺は何度、この月を見たのだろうか。いや、そもそも俺は何故この景色が俺の心なのだろうか。

しかし、この月を見ているとどうしても思い出してしまう。あの戦いを、あの運命の約束を。

「……………」

俺は静かに目を瞑る。そして、思い出す。あの戦い 第五次聖杯戦争を。

俺がシロウの兄であり、イリアのサーヴァントだったあの戦いを

『シキ兄、早く行こうぜ!』

『先輩、早く行きましょ?』

俺の守りたい人だち。

『……バーサーカーは強いね』

俺の守るべき大切なマスター。

『シロウ、朝食の時間です。シキも早くしてください』

『貴様……本当にバーサーカーなのですかッ!?!』

大切な弟のサーヴァントであり、最も強敵だったセイバー。

『ふむ、私に剣を習いたいと言うのかな? 君は』

『……すまない、兄さん。アンタは、俺のせいで』

皮肉屋で、かつこよくて、それでも相変わらず変わらない正義の味方のアーチャー。

『へえ？ アンタは士郎と違ってそこまで馬鹿じゃないのね。……ちよっとシキ？ 誰がうつか凜よッ！！』

『な……！ 待って、貴方の真名って 』

魔術師の癖に人思いで、なんだかんだ言っただけ結局最後は助けてくれて、俺の正体にも気付いた遠坂凜。

色んなことがあった。戦い、笑い、裏切られ、それでも俺たちは生き残った。

『バーサーカー……嫌だよ、消えないですよ。ずっと、ずっと一緒にたつて約束したじゃない……』

『ごめんなイリヤ。でもさ、証明しただろ？ やっぱり自分のサーヴァントが最強だったって』

『そんなもの望んでなんかいない！ バーサーカーが、バーサーカーが側にいてくれたら私はそれで……！』

『我が儘を言うなよマスター。聖杯はセイバーが壊した。もう……俺はこの世界にはいられない』

『バーサーカー……』

『イリヤ。一つだけ、約束してくれないか？ これからは自分のために生きてくれ。聖杯としてではなく、一人のイリヤという少女と』

して。こんな、最後までダメダメだった駄目サーヴァントのたった一つのお願いだ』

『……うん、わかった。約束する。ちゃんと私、自分のために生きるから。こっちのシキを、英霊なんかさせないから！ だから、バーサーカーも……！』

『大丈夫、約束するよ。俺も、自分のために生きるって。……今までありがとう、イリヤ』

『私も。私のサーヴァントになってくれて、ありがとう。シキッ！』

「……まったく、俺には勿体無いくらい、いい話だよ」

俺はイレギュラーな英霊だ。世界と契約し、それでも一つの個として記憶を共有している。そのため、俺の記憶はまだ残っていた。

……イリヤと約束した自分のために生きるということ。それは、今の自分に来ることなのだろうか？

「……いや、できるかじゃない。やるしかないんだよな、マスター」

そうだ、やるしかないのだ。俺の願い　一人でも多くの人を助けるために。

俺は再び目を瞑り、時を待つ。また、俺が呼ばれるのを待ったために。例え何年過ぎようと、俺はずっと覚えている。あの日の約束を、彼女の笑顔を、俺はずっと覚えている。

だから何年過ぎようと構わない。例え俺が俺でなくなっても、彼女の笑顔を覚えている限り、俺は『シキ』なのだから。

だから

「……………」

声が聞こえる。

『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる時を破却する』

「……………フツ、また俺みたいな駄目英雄を呼ぶ物好きがいるのか？」

まったく、呼ぶならもっとマシな英雄がいるというのに。

願いが聴こえる。

『告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』



「これは……なるほど、そういうわけか。今度は過去の聖杯戦争つてなわけね」

詠唱と共に聴こえてきたマスターの願いが、俺に戦う目的を作る。

覚悟が伝わってくる。

『 されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手操る者 』

「……ったく、どいつもこいつも、そんなに俺をバーサーカーにしたいのか？ まったく、最初から狂っている奴にそれ以上狂えって言うのかよ」

そんな言葉とは裏腹に、俺の顔には笑みが刻まれる。

もしかしたら、本当にもしかしたら、俺は運命を変えられるかもしれない。あんな地獄を防げるのかもしれない。

魂の叫びが俺の心に響き渡る。

『 汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ 』

その声と共に、俺の身体は光り輝きその場から消えていく。跡形もなく、真っ白に。

召喚されようとしている。俺を呼び出そうとしているマスターの下に。

「いいぜ、叶えてやるよ、マスターの願い。俺みたいな駄目サーヴァントを呼び出す報酬だ」

願い事はただ一つ。俺はその願いのために、全力で力を貸そう。それが、イリヤとの約束だから。

だからマスター、叶えてやるよ。あんたの願い

”桜ちゃんを、救ってくれッ!!”

次の瞬間 俺の身体は光に飲み込まれた

逆巻く風と稲光。その風圧のあまり、目を開けることすらままらな  
い。

……いや、そもそもそれが理由ではない。

俺 間桐雁夜は本来魔術師ではない。そもそもそんな名前、名乗りたくもない。けど、そうならなければならなかった。

聖杯戦争。俺はそれに、どうしても勝たなくてはならなかった。…  
…例え、残りの寿命を一ヶ月にまで減らしてでも。

「ぐ、はぁ……」

魔力の放出が止まり、身体の中にいた『刻印虫』が動きを停止する。その瞬間、立っていることも出来ずその場で膝をついてしまう。

「カツカツカツ！ よもや本当にサーヴァントを呼び出すとはな！  
ほれ、何をしておる雁夜。早く自分が呼んだサーヴァントを確認せんか」

俺の横にいた爺 間桐臓硯が、うるさくも甲高い声で笑う。

うるさい吸血鬼。お前にいわれなくてもわかっている。

俺は見える右目で視界をこらし、白い煙を見つめる。巨大な魔方陣で描かれたその中心に立っていたのは

だが、それを確認することは出来なかった。

姿が見えるその直前、黒い影が白い煙から電光石火の如く凄まじい速さで動いた。

俺は、それに反応すらできず

グシャッ！

……何か突き刺さった音がした。だが、身体には何の変化も感じない。恐怖のあまり、瞑っていた目を開く。魔方陣の方をこらして見つめてみるが、誰もいない。

そう、魔方陣の方にはいなかった。

「ば、バカな……………ッ！」

驚愕に染まった声が聞こえる。その人物は、恐らくどんな状況でも驚かないはずの男 間桐臓硯だった。

間桐臓硯の胸下には一本のナイフらしき物が突き刺さっており、それを刺した黒い何かは静かにただずんでいた。

しかし、いったい何を驚いているんだ？ サーヴァントが自分に攻撃したこと？ だとしても、すぐに仮の肉体を捨てて元に戻り、俺に言うことを聞くよう命令すればよい。

あれは、あの様子はまるで

「わ、ワシが死ぬというのか!？」

まるで、今にも生死を分けるような。

臓硯の身体はナイフで引き裂かれることもなく、どういっわけか白

い灰となって消滅していく。塵も一つ残さず、真っ白に。

「何故だ！？ 何故、こんなものでワシを殺せるのだッ！？」

臓硯は狂ったようにのたうち回る。死にたくないない、何故こうなったと何度も叫ぶ。

『……俺も、まさかアンタを二度も殺すことになるうとは思わなかったさ』

ふと、まるで死神のような冷たい声がある。その場に響く。俺はその声に聞いた瞬間飲み込まれた。

そう、目の前にいるのは人の形をした『死』だ。それを見ているだけで、全身の毛が逆立つ。

故に、そんな存在に殺気を当てられている臓硯は、気も狂いそうなのだろう。まるで子供のように、酷く震えた状態で怯えることしか出来なかった。

「あ、が、があ……………」

『悪いな、今度は迷わず…………死んでくれ』

壊れた機械のような声を出す臓硯に、その何かは一切躊躇することなく脳天にナイフを突き刺した。

「わ、ワシは……………」

それが臓硯の最後の言葉だった。そう言った直後、臓硯の身体は全

身から白い煙を出し 跡形もなく、消滅した。

……突然のことに頭が働かない。いきなりのことで、頭がパンクしそっだ。

ただ、これだけはハッキリしている。

「……間桐臓硯が、死んだ」

声に出してもその実感が沸かない。一番憎むべき存在が死んだのに、何も思わない。

俺は

『 さて』

「ッ!？」

今の今まで動かなかった黒い何かが声を発した。

もしかしたらコイツは暴走しているのかもしれない。なら、令呪を使っても暴走を止めなければ！

俺はすぐさま令呪を発動しようとして 動きを、止めた。

黒い何か いや、黒いロングコートを羽織った男が振り返ると同時に、今まで顔を隠していたフードがパサリと落ち、素顔が見えた。

真っ黒に染まった黒い髪、日本人特有の顔付き。そして何より

まるで宝石のように透き通り綺麗に染まった、蒼色の瞳。

俺はその瞳の美しさに、目を奪われてしまった。

『さて、今更ながら気もするが……一応聞こうか』

『 問おう、お前が俺のマスターか』

これが、俺の運命を変えた始まりだった

さあ、Zeroの始まりは告げた。

並行世界の英霊と半端な魔術師よ。君たちの戦いは破滅しか待っていない。

それでも進むなら、君たちに敬意を表示よう。

君たちに、光あれ、と。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8995z/>

---

FateZero 月に照らされた『殺人貴』

2011年12月28日08時48分発行